

信濃毎日新聞の1面  
の左下の「こと映え」。  
6月のお題「羽を伸ばす」・「弓つ込み思案」。  
「仮の顔も三度」・「大  
胆不敵」にペントや衝

# フリーは風 (現場)からの風

で見掛けた生き物の写真と四字熟語などを纂集するコーナーが面白い。活字離れが叫ばれている中で、なるほどと思わされる動物の表情に朝食の話題が盛り上がる。そして、1面の記事が気になり新聞を読んでいる自分に驚かされる。

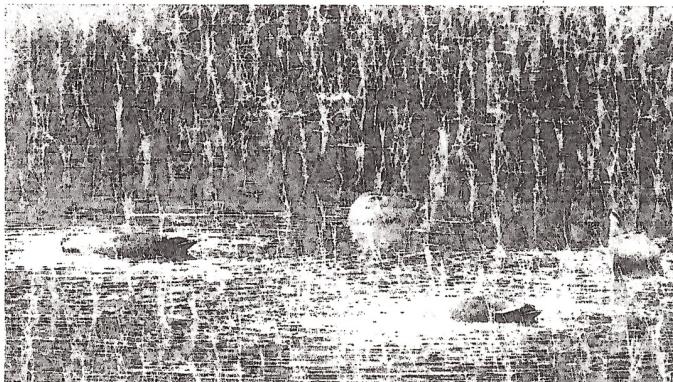
俳人の正岡子規が衣替えの時季を「六月を綺麗(きれい)な風の吹くことよ」と歌ったが、6月初旬、我が父の弟の倉科孝教さんが享年98歳で亡くなった。通夜で家族が声がけをする。昔から「人間、窗を引き取っても耳はしばらく聞こえる。通夜

で死人の悪口は禁物」と言われるぐらいだ。呼び掛けた言葉が届いてほしいと願ってしまった。走馬灯のように題い出が込み上げてくる。2人で国技館の棧敷席での相撲見物。そ

的表現力やプロ作家の革新的創作力が歌謡曲の黄金時代を謳歌した時代。最近は、カラオケの普及もあって歌いやすい曲ばかり求められる時代だが、当時の叔父は、歌唱力、表現が楽しくなる

水の価値を考える事で  
自然との営みが楽しくなる

風景だが、世界的には非常に珍しいと植物学者の稻垣栄洋さんが「水」の価値を紹介した。農作物の栽培には、「連作障害」がつき物で、生育が悪くなったり、病虫害が発生する。だから欧洲では麦を刈り取つたら、家畜を放牧して畑を休める三圃（さんぽ）式農業が普及した。では、稻作はどうして大丈夫なのか。それはひとえに水のおかげ。田んぼに水を流すことで、余った養分や有害物質が洗い流され、新しい養分も供給される。水を入れたり乾かしたりすれば、同じ病原菌も増殖しない。



量ゼロを記す  
故郷の「水」  
に入れば豪雨  
報が各地で出  
見守ってほ  
いと叔父に  
お願いし  
た。悲しい  
一時でも  
あつた。  
(NPO法  
人信州地域  
社会フォー  
ラム理事  
白馬村森  
上) 恩恵に思わ  
る鴨、水の  
水面を活潑  
に動きまわ  
すほほ笑む